

2023年度(令和5年度) 大阪暁光高等学校 学校評価

1. めざす学校像

学校法人千代田学園の始まりは、真言宗盛松寺住職の故高橋道雄師が、第二次世界大戦後の荒んだ世相を憂いて、庶民のために学問所を開いた弘法大師空海(774-835年)の偉業に倣い、1950年に千代田高等学校、附属幼稚園を開設したところに遡る。弘法大師は、身分や貧富にかかわらず門戸を広く庶民に開放し、あらゆる思想・学芸を総合的に学ぶことができる私立学校「綜芸種智院」を創設(829年)し、そこで多くの前途有望な青年を育てようとした。本学園は、この精神を受け継いでいる。

「人間教育」を建学の精神として、若い世代に豊かな人間性を培うとともに、平和で民主的な社会の形成者として必要な知識、教養と、それに基づいた技術を教授することにより、社会や地域を支え、また支えられる人間を育成することを基本的な考え方としている。その具現化として、本校は、社会的共通基盤を担う教育、福祉、医療など対人援助職の分野を指向する若人を輩出する学園づくりを大きな社会的ミッションとしている。本校は、これまで積み上げてきた一人ひとりが自らの人生の主人公として生きる力(主権者教育)の成果を土台としつつ、志や目標を持って入学してきた生徒とその保護者の期待に応えていくための教育の創造に全力で取り組んでいく。

2. 中期的目標

1. 「人間教育」を理念とする普通科の魅力を生み出す教育実践を行う。
 - (1) 普通科の新コースである教育探究コース、幼児教育コースの教育内容を完成させていく。
 - (2) 「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめていく。
 - (3) 特別活動を教育活動にしっかり位置づけ、自治の力を育てていく。
 - (4) 社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめていく。
 - (5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートしていく。
 - (6) 生徒の発達可能性を信じて諦めない指導を続け、転退学者を減らしていく。
2. 系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。
 - (1) 1年次は“職業”、2年次は“学問”をテーマに卒業後のキャリアを考えさせていく。
 - (2) 年間教育活動の中で、進路実現につながる多様なサポートをすすめていく。
 - (3) 併設短大への内部進学希望者を増やす。
3. 基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師の育成を目指す。
 - (1) 命と向き合う職業に就く者としての自覚と誇りを育てていく。
 - (2) 看護専門科目と普通科目を共に重視し、基礎学力の向上を図っていく。
 - (3) 将来、医療現場でチームとして働くことを考え、チームで責任を果たせる力をつけていく。
 - (4) 就職活動、臨地実習、国家試験の受験学習を両立して取り組ませ、国家試験100%合格をめざす。
4. 高校を支える諸組織や地域との連携を強め、地域社会に貢献する。
5. 部活動を活性化させていく

《学校アンケートについて》

教育活動の現状や問題点を確認・点検し、教育改善のための方策を明らかにする目的で、2023年10月に学校アンケートを実施した。

アンケートは、【A. そう思う、B. どちらかと言えばそう思う、C. どちらかと言えばそう思わない、D. そう思わない、E. わからない】の5択でおこなった。()内の数値は、「A. そう思う」「B. どちらかと言えばそう思う」を合算したものである。調査回答は、在校生645名/回収率77.1%(昨年度682名/回収率81.6%)、保護者445名/回収率53.2%(昨年度525名/回収率62.8%)である。

3. 学校関係者による評価

【実施評価委員会】2024年5月25日に開催

委員長 玉崎和実(学園監事・元地元自治会長)

評価委員 高松美佐子(PTA会長) 葛目己恵(同窓会会長) 福井雅英(教育探究コース特別講師) 河野直明(学園監事)

❖ 数字は、【そう思う】+【どちらかと言えばそう思う】の合計

❖ ()内は昨年度との比較である。

■ 校長の評価

1 学校教育全般の評価

* 最も重視すべき項目である「この学校に入学してよかった」に対する保護者の回答は、81.7%(前年比-1.9%)という高い割合であった。学校が保護者からの信頼を得られていると評価できる一方、生徒の割合は、64.5%(前年比-1.7%)にとどまり、否定的な回答をした生徒が18%(2022年度は20.1%)存在する。この点については分析が必要である。満足度が相対的に低いのは看護科である。看護科は、厳しい実習を含む専門的な学びが求められることに加えて、一本道の進路であるため、「本当にこの道(この学校)でよかったのか」という迷いが生じやすい。それらを乗り越え、専攻科に進んだ生徒に関しては、逆に100%に近い満足度になっていると思われる。

* 評価が高い項目は、看護科・教探コース・幼教コースの「特色ある授業」と、「学校行事」についてである。「特色ある授業」の満足度(今回からの項目)は、在校生の満足度が78.7%、保護者が87.2%。看護科と幼児教育コースの堅調な生徒募集は、この「特色のある授業」が背景にあると考えられる。

* また、「施設設備に満足している」が在校生72.0%保護者86.3%、「校内美化が行き届いている」が82.9%と、教育環境面での満足度は高い。

2 学習指導、進路指導

* 2023年度は、授業改善を重点方針に掲げ、「問い」と「対話」を重視して生徒同士が学び合う魅力ある授業づくりに取り組んできたが、残念ながらアンケート結果には反映されなかった。「授業がわかりやすい」は62.5%(-6.3%)、「授業中に深く考えたり、意見を述べたりする機会がある」は56.0%(-1.6%)、「学力がついてきたと実感できる」は54.7%(-0.2%)である。これらの結果を踏まえ、さらに授業改善を進める必要がある。特に、これまで生徒から高い評価を得ていた「わかりやすい授業」に対する評価が年々低下している点については、慎重に検討する必要がある。

- *「自分から勉強しようとする思いが大きくなった」と回答した生徒は53.9%(-2.1%)で、KG週間にしか家庭学習をしない生徒が増えている。学ぶ意欲が育つ授業づくりを進めるとともに、学びに向かう姿勢(意欲)を育むクラス活動の展開が求められる。
- *学習規律については、「授業時間と休憩時間のメリハリがある」が42.1%(-3.8%)、「授業妨害を先生がしっかり指導している」が47.9%(-2.7%)であり、授業を「自分の学習権も他者の学習権も大切にす」学びの空間として成立させることが依然として大きな課題である。この項目に関して、クラス間に差異が見られるため、学年やコースごとに具体的な方針を持って対処していくことが求められる。
- *3年生を対象に今回から設定した「希望する進路を実現するため丁寧な指導がされている」の項目は、生徒68.5%保護者76.0%である。進学総合コースにおける評価が高い。また、進学総合コースと教育探究コースを対象とした「1年生から進路を考える機会が作られている」の項目は1年生が64.1%、2年生が62.1%である。3年間を通して体系的に「なりたい自分を見つける」プログラムを充実させていく必要がある。

3 人権・生活指導

- *「命や人権を尊重し、差別を許さない教育が行われている」は67.0%(-0.7%)、「暴力問題やいじめが起きた時に適切な指導が行われている」は57.4%(+6.8%)であり、引き続き事象発生時の迅速で組織的な対応が課題である。
- *今のクラスで4月から「いじめを受けている人がクラスに存在した」の項目では、1年で5クラス、2年で3クラス、3年で7クラスにもものぼる。いじめがあることを前提とし、早期発見に努める必要がある。
- *生活指導については、「厳しすぎる」生徒37%保護者4%、「適切である」生徒47%保護者64%、「緩すぎる」生徒16%保護者32%と、生徒・保護者の意見が対称的である。共に「適切である」が最も多いが、生徒が社会性を身に付け、自律的に行動できる力を育成することが必要である。生徒募集の観点からも重要である。

4 特別活動・課外活動

- *「行事は、生徒が楽しく参加できるものになっている」と回答した生徒の割合は71.0%(-6.1%)と高い満足度を示している。一方で、「生徒会活動やクラス活動は生徒主体のものとなっている」生徒の割合は57.8%にとどまり、クラス間で大きな差異が見られる。
- *部活動に関しては、「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」と回答した生徒の割合は68.3%(-10.2%)と、前年度からの減少が見られるが、生徒の主体性が発揮されているといえる。

5 教育環境

- *「施設設備に満足している」は、生徒72.0%保護者86.3%、「校内美化が行き届いている」は生徒82.9%となっている。これらの結果は、施設グループ(管理部)の職員の日常的な努力の成果といえます。
- *「制服(デザイン着やすさ)に満足している」は生徒65.6%保護者84.8%と高い水準を示している。
- *一方「食堂のメニューや味付けに満足している」は生徒51.7%と、改善の余地がある。

6 その他

- *アンケート結果は、学級ごとに集計されており、多くの項目で担任による指導の違いが反映されている。「悩みがある時に安心して担任に相談できる」といった重要な項目でも差異が見られる。担任の個性や指導力の違いがあることを前提として、学年・コースとして全体での組織的対応が望まれる。

■学校評価委員の意見

- ❖在校生から 645 件、保護者から 445 件のアンケートに対する回答を得られたことは、学校への関心の高さを感じるとともに、学校側からの日常の情報提供や生徒に寄り添う丁寧な指導の努力の結果であると思われる。しかし、回答数が昨年度と比べて在校生・保護者ともに減少している。適正なアンケート結果を得るためには、回答数を増加させることが必要で、調査方法・調査時期を検討する必要がある。
- ❖全体的に高い評価となっているが、マイナス評価の項目をしっかりと分析し、改善していくことが大切である。
- ❖看護科、幼児教育コース、教育探究コースでは、特色ある授業を受けることができていると感じている人が多く、学校の努力の成果と思われる。同時に、進路を変更しても失敗と考えず、前向きに捉えることができる強さも育んでいくことができればと思う。
- ❖「授業が分かりやすい」の評価が低下している。授業内容、進め方等の改善が必要と思われる。学習規律面でクラス間に差異があることに対しては、学年やコースごとに適切な対応が必要ではないか。
- ❖食堂メニューや味付けに対する満足度が3年生で特に低い。3年間同じメニューに飽きが来ているものと思われる。新たなメニューの開発等、改善が望まれる。
- ❖3年の進路を実現するための指導が行われているという点では、教員が一人ひとりの生徒の将来にしっかりと向き合っていると感じることができる。
- ❖進路指導について、約半数の生徒は満足しているが、約40%の生徒はそうではない。満足できていない生徒の声を具体的につかむ必要がある。
- ❖97.7%の生徒がいじめを受けていないと回答していることは、生徒にとって安心できる学校になっていると評価することができる。しかし、「いじめを受けている生徒」が0.3%、「自覚のないいじめをした生徒」が0.9%、「クラスにいじめが存在することを知っている生徒」が0.7%存在する。保護者もこれに近い認識である。フォローアップ体制をしっかりとる必要がある。
- ❖アンケート結果から、保護者は学校(先生方)に、子どもたちの成長をしっかりと見てもらっていると感じ、安心感を持っていると考えることができる。
- ❖保護者の回答について、高校生になると、子どもとの日常会話が少なくなることから、授業や設備・施設についての設問に対して「どちらともいえない」を選ばざるを得ない状況が生まれているのではないか。保護者が学校の様子を知る機会(学校行事への参加や懇談会など)を活用している方かどうか、結果に影響を与えていると思われる。

4. 本年度の取り組み 及び 自己評価

	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価の指標	総括・自己評価
普通科の魅力を創出する人間教育の	(1)開設4年目の教育探究コースと幼児教育コースの充実を語る。	《教育探究コース》 ・活動的な授業を年20回以上実施 ・調査研究活動を年50時間以上実施 ・プレゼンテーションを年3回以上実施	・学校アンケート ・特色あるカリキュラムの実施回数	《教育探究コース》 ・活動的な授業を年80回以上実施、調査研究活動を年200時間以上実施、プレゼンテーションを年50回以上実施。 ・地域のフィールドワーク、高野山合宿、楠小学校訪問、天野小学校訪問、きのくに子どもの村学園訪問を実施した。 ・ニュージーランド研修を通じて、異文化交流をおこない多様性について学ぶことができた。 ・河内長野市教育委員会・ふるさと歴史学習館との協働で地域学習に取り組み、その成果を市主催イベントで生徒が発表した。 ・学校アンケートの「特色ある授業が行われている」という項目では、88.8%と高い評価を得ているが、授業に対する満足度は62.7%と大きな開きがある。1年生の満足度が低いのは、月に何度も地域のフィールドワークに出かける過密なカリキュラムが影響しているのではないかと考えられる。 ・「教育人間探究の時間」において、自己探究・地域探究・教育人間探究を柱に、たくさんの「ヒト・モノ・コト」に出会わせながら、「自己との往還」を重ねた。プレゼンテーション等を通して探究的なスキルと表現力を身に付けてきた。

<p>前 進</p>		<p>《幼児教育コース》 ・保育実習を各学年 1 回以上実施 ・高短連携授業の充実 ・保育ボランティアを年 2 回以上実施 ・保育検定の実施</p>		<p>・高野山大学文学部教育学科と連携した授業をおこなった。 《幼児教育コース》 ・園児たちと関わる機会をたくさん持つことができるようにシラバスを設定した。 ・「放課後遊び体験」は、1 年生を中心に 4 月から実施した。1 年生は延べ 140 回、1 人平均 2 回の体験をすることができた。 ・1 年生は「クリスマスコンサート」と「幼稚園のバザーで遊びコーナーを担当」、2 年生は「夏まつり」実習と「幼稚園・保育園半日保育体験」、3 年生は「幼稚園一日保育体験」を実施した。 ・「特色ある授業が行われている」は 90.1%、満足度は 78.0% とともに高い。 ・「保育者のこころ」と人権思想に裏付けられた子ども観を持つ子どもに寄り添う保育者を育てるために、基礎学力の育成に力を入れるとともに、特別活動を重視し、ホームルーム活動や「ウミガメツアー」(希望者)や「一日野外実習」に積極的に取り組んだ。 ・幼児教育・保育の園児指導経験者が「保育実習演習」や「高短連携授業」を担当し、授業の充実を図ることができた。今年度より「ピアノ実習」「保育基礎」は千代田短期大学ではなく高校で実施し、短期大学を知る機会を作るために 1 年生は 11 月、2 年生は 8 月に短大訪問をおこなった。3 年生は本校生専用のオープンスクールを 6 月に 2 度実施した。 ・幼児教育以外の進路希望者が、「ピアノ」「高短連携授業」等の保育専門科目において学習姿勢が後退する課題について、「ピアノ」において授業内容を工夫することによって改善を図ることができた。</p>
	<p>(2)「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめる</p>	<p>・教科会議の定例化と実践交流 ・公開授業の定例化 ・夏期校内研究会での教育実践の交流 ・新教育課程の策定に向け「新教育課程づくり委員会」で議論 ・ICT 教育係の立ち上げ、ICT 教育環境整備と実践研究</p>	<p>・学校アンケート ・生徒からの意見や要望 ・生徒総会に出された要求</p>	<p>・「わかりやすい授業になっている」が 62.5%、「深く考えたり意見を述べたりする機会がある」が 56.0% であり、昨年度より微減していることは課題である。一方で、「自分から勉強しよう」という思いは、53.9% と昨年度より微増しており、勉学への意欲は醸成されつつある。 ・校内教研では、「問いと対話を重視した授業づくり」の観点から、数学教員(多賀氏)による授業実践の報告から学んだ。後半は、教育学者の宮下与兵衛氏による主権者教育を軸とした学校作りについて、本校の教育の意味付けを行っていただいた。 ・ICT 委員会を立ち上げ、毎週の定例会議で有効的な活用について議論してきた。 ・公開授業については ICT 担当者については行えたが、他教科他教員への広がり課題を残した。</p>
	<p>(3)特別活動を教育活動の中にしっかりと位置づけ、自治の力を育む。</p>	<p>・実行委員会等を組織し、生徒中心に行事を運営 ・行事や生徒会活動で全校集団づくりを推進 ・月曜放課後の HR 活動活用 ・家庭学習週間、放課後学習会をクラス活動として展開 ・生徒会議案書討議の活性化</p>	<p>・学校アンケート</p>	<p>・昨年に続き 6 月に体育大会を実施した。当日はグラウンドに応援席を設置し、昨年よりさらに種目を増やした。応援団は 3 年生を中心に結成された。よくまとまり、見事な発表を披露した。 ・文化祭はコロナ前の状況にできるだけ戻すべく、生徒実行委員会を中心に相談しながら進めた。 ・文化祭では、密を避けるために、2 部制にして体育館発表をおこなった。PTA の援助を受けて実施したキッチンカーは大変好評であった。クラス学習会、外部講師による講演やフィールドワーク等を積極的にを行い、社会的視野を広げる機会となった。 ・「行事は生徒が楽しく参加できるものになっている」が生徒 71.3% と、高い水準を保っている。 ・全校集団づくりの一環として縦割り充実ノート学習会を実施した。3 年生が自信と成長感を持つ場となった。 ・テスト前放課後学習会を全てのクラスで実施できた。50% を超える生徒が、学習意欲向上のきっかけとして KG・充実ノート、放課後学習会をあげている。 ・「家庭学習週間」に約 60% 以上の生徒が参加することができた。取り組みをクラス活動として展開し、さらに多くの生徒が参加することが課題になっている。 ・HR 活動として位置付けている月曜放課後の時間帯を、十分活用できていないクラスが存在した。 ・生徒総会において、全クラスが学校への施設設備や授業に対する要求を提出し、要求実現運動に取り組めた。 ・「行事は、生徒が楽しく参加できるものになっている」の満足度が高く 71.0% である。一方、「生徒会活動やクラス活動は生徒主体のものになっている」の満足度は 57.8% で、クラス間で大きな差異が見られる。 ・部活動では、「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」が 68.3% (-10.2) と、前年度からの減少は見られるが、生徒の主体性が発揮されているといえる</p>
	<p>(4)社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめる。</p>	<p>・生徒の行動の背景を掴みながら指導 ・毎朝の登校立ち番指導 ・放課後の下校立ち番指導(毎日ではない) ・放課後の地域巡回指導 ・定期的な身だしなみの教化指導 ・学期の最初と考査直前の頭髪指導 ・学期に 2, 3 回の 1 日玄関指導 ・行事後の玄関下校指導 ・入試前の身だしなみ教化指導 ・遅刻、欠席指導での家庭との連携強化 ・スマホの取り扱い・マナーについて、HR 等で考えさせる指導 ・食堂におけるマナーの向上に向けて指導 ・生活指導を業務とする常勤講師の雇用(昨年までに引き続き)</p>		<p>・終焉したとはいえ、コロナ禍が生徒の精神面や基本的な生活習慣に大きな影響を与える中、生徒個々の状況をしっかりと掴み支える方針を持って指導に臨んだ。 ・進学総合コースの 2・3 年生で、遅刻 10 名以上のクラスが 2 桁以上あった。生活の実態調査を踏まえた分析が必要である。保護者に対して、日常の連絡と月末ハガキで通知しているが、さらに密に連携していく必要がある。 ・頭髪指導は、長期休暇明けと定期考査前に重点期間を設け、保護者の協力も得ておこなった。 ・生活指導を主たる業務とする常勤講師を配置し、毎休み時間に通用門指導、更衣室の戸締り、廊下巡回を行った。 ・「授業時間と休憩時間のメリハリがある」のアンケート結果が 42.1% と例年通りよくない傾向が続いており、と同時に「落ち着いて授業を受けられるよう先生がしっかり指導をしている」と答えたのは 47.9% に留まっており、学習規律の確立が課題である。 ・スマホ指導について、マナーや取り扱いについて振り返らせる HR を持つことができなかった。SNS についてのルール作りが早急に求められる。 ・授業中のスマホの使用禁止を提起して 2 年目である。堂々と机の上</p>

			<p>で触る者が減少している。その分、授業中の私語の増加がみられる。生徒自らが「使用モラル」を確立できるような指導が求められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「命や人権を尊重し差別を許さない教育が行われている」のアンケート回答は 56.7%である。「人間教育」を理念に掲げる学校としてさらにアップさせていきたい。 ・教師が生徒としっかりと対話し、問題行動の背景を掴み、生徒自身の課題と向き合える指導をすすめられるよう、研修を実施していく必要がある。 ・生徒アンケートでは、本校の生活指導が「厳しい」が「緩い」の数値を上回り、保護者アンケートでは、「緩い」が「厳しい」を圧倒的に上回る。この点を踏まえ、厳しくする方向にステップアップしていく必要がある。 	
	<p>(5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・支援教育委員会の会議(週1回)の定例化 ・必要に応じてケース会議を行う。 ・学級担任と養護教諭、スクールカウンセラーが情報を共有し、適切な指導を行う。 ・学年主任は学年の生徒全員を俯瞰し、特に留意すべき生徒について、支援教育委員の情報共有と指導方針の合意を図る。 ・サポートルームを常設する。 ・スーパーバイザーのアドバイスを活かし、適切な指導を行う。 ・外部機関との連携をはかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート結果 ・会議内容 ・学習会実施状況 ・サポートルーム利用状況 	<ul style="list-style-type: none"> ・「命や人権を尊重し、差別を許さない教育がおこなわれているか」という問いに「そう思う・どちらかと言えばそう思う」と答えた生徒は 67.0%である。また、「暴力やいじめが起きた時は許さない指導がおこなわれると思うか」という問いには 57.4%、「生徒の人格を大切にしたい指導がおこなわれているか」という問いには 61.4%が同様に答えている。その一方で、「相談したいことがあるときに、保健室やサポートルームは利用しやすいか」という問いに「そう思う・どちらかと言えばそう思う」は 49.4%と、高い数字とは言えない。学校全体で、さらに生徒が安心して過ごすことができる環境を充実させる必要がある。 ・支援教育コーディネーターが週1回のペースで支援教育委員会を開催し、情報共有と指導方針の合意形成をおこなった。 ・適宜ケース会議を持ち、支援が必要な生徒への見方を一致させ指導した。 ・サポートルームに担当者を配置。教室に居りにくい生徒の学習援助・悩みの相談などを行った。内容については担任に報告し、生徒理解を深めた。 ・スーパーバイザーの助言により、必要な生徒を専門機関に繋いだ。 ・進路指導や総合的な生徒指導の面での具体化を図った。 ・支援教育委員は関係する研修会に積極的に参加し、指導に活かすことができた。
	<p>(6) 生徒の発達の可能性を信じ、諦めない指導を続け、転退学者を減らしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒に寄り添う丁寧な指導 ・保護者との日常的な共同 ・転退学者率を 5%以内にする ・経験の浅い教員をサポート体制 	<ul style="list-style-type: none"> ・転退学者数率 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度と比較し、専攻科を含む 1~5 年生の転退学率は、2.6%から 4.3%へ上昇した。高校 1~3 年生でも 2.5%から 4.6%へ上昇した。 ・5%以内には押さえることができたものの単位制通信制への広がりも相まって、転退学を安易に選択してしまう生徒たちへの丁寧な指導および、勉学意欲の醸成がより求められる。 ・心の悩みを抱えた生徒や教室に入りにくい生徒対しては、支援員を中心としたサポートルーム体制を充実させることで対応した。 ・副担任制を樹立し、担任をサポートするシステムを構築した。
<p>② キャリア教育の推進と進路実現</p>	<p>系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学年に応じたキャリア教育の推進 ・基礎学力の定着及び学力の向上 ・生徒全員の進路決定 ・看護医療系進学希望者の個別指導による実力養成 ・英検、漢検などの各種検定試験での資格取得 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路状況 ・資格検定者数 	<ul style="list-style-type: none"> ・1 年生では、進路適性検査をおこない、その後で職業理解のための「職業分野別ガイダンス」をおこなった。振り返りの時間を設け、生徒が自身の将来について考える機会を持つことができた。2 年生では、進路決定の参考として「学問分野理解ガイダンス」をおこない、それをもとに上級学校へのオープンキャンパス参加促進を図った。生徒の実態、進路希望に即したキャリア教育をさらに充実させていく必要がある。 ・3 年生は、進路説明会を 4 月 7 月 8 月と 3 回実施。進路指導部と担任が連携して希望進路や受験先に合わせたきめ細やかな指導をおこなった。 ・国数英の教科で進路講習を実施。参加者は意欲を持って学んだ。 ・就職希望者 13 名の内定率は 2 次募集も含めると 100%であった。企業・事業所選択とマッチングについては早い段階から取り組むことや就職希望者に対する基礎学力、コミュニケーション能力の育成及び受験に向けての一人ひとりへの個別指導等が課題であり、その課題に対して継続して取り組みたい。 ・看護医療系の進学希望者6名の合格率は 100%であった。進学総合コースで看護医療系の選択科目を 2 年段階で 2 単位、3 年段階で 4 単位設定し、受験校の分析をおこない、一人ひとりに合わせた個人指導を放課後おこなった結果である。看護医療系進学希望者の進路保障に向けて、指定校の拡充に取り組みたい。 ・延べで 60 名近くが英検、漢検、情報処理各種検定に合格できた。努力が結果として現れ、達成感を持つことができた。一方で検定への受験希望者が減少している点について分析が必要である。
<p>③ 五年一貫看護科課程の完成</p>	<p>基礎的な理論・技術を身につけ、患者一人ひとりをかけがえない存在として捉えられる看護の心を養う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・命と向き合う専門職としての自覚を育成する。 ・高校3年間の基礎学力の向上のために学習する習慣を過半数が身につける。 ・臨地実習での指導者・患者からの学んだことを報告できる。 ・チーム責任を果たすためのグループ学習を増やし、全員がリーダーとしての経験を積めるようにする。 ・看護専攻科における就職活動、臨地実習と国家試験対策の両立 ・就職率 100% ・国家試験合格、既卒生を含め 100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケート ・国家試験合格率 ・就職内定率 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 年生に行う戴帽式では、1年半の学びを振り返り、命と向き合う責任ある看護師となることを全員が決意できた。 ・家庭学習の定着を目標に、教科から配布する自主学習課題が、こなすだけのものとなり、主体的・積極的な学びに結びついていない。自ら考えて日常的に学習する生徒は約 30%。「授業がわかる」「学力がついた実感」についても学年が上がると共に減少している。(3 年: 42%・2 年 45%・1 年 62%)難しくなっていく学習内容に対し、教科指導の在り方が課題となっている。 ・実習報告会でのまとめ報告を全員が報告する方式にしたことで、発言や表現の仕方を考えさせることができた。聴く側の立場に立った報告にしていくことは課題である。 ・4 年生有志が高校の文化祭に参加し、模擬店の企画・運営を自主的におこない成功させた。見通しをもって進めていく経験ができ、リーダーとしての力量を高めることができた。 ・5 年生は、実習後に看護に向き合う姿勢が変化した。「ねばならない」という受け身の姿勢から、「患者さんのためにおこないたい」という主体的な姿勢に変化した。(85%)それが学習意欲につながっていった。 ・5 年生の研究発表では、自由闊達な意見交換ができた。患者さんを第一に考えての実践やしっかりとした看護観を持った発言から学び合うことができた。「看護の心」が育っていることを実感できた。 ・カリキュラムが密で各科目の課題に追われている 4 年生は、試験に合

				<p>格するための勉強になってしまい、欠点者も多く、特に多い科目では60%に達している。このような、断片的な知識から教科横断的な学びへと進化させるためには、深い思考を促し、社会的視野を広げる指導が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国家試験対策では、既卒者を含めた合格率が99%、現役生は95.1%であった。9月からグループワークを重視し、人間関係を構築することで、集団的な学びが促進された。その結果、国家試験の勉強が楽しかったと語る生徒が多く生まれた。 ・実習と両立しながら就職活動を行い、自分のやりたい看護ができる病院を選んだ結果、100%の就職を決めることができた。
④ 地域との連携	<p>地域の諸組織との連携を強める</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・敬老会の協力を得た看護科「老年看護」実習の実施 ・地域全育成会、防災訓練、文化行事、美化活動への参加 ・敬老会への慰問ボランティア ・地域中学校の部活大会の開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加回数 ・参加生徒の声、地域団体からの意見 	<ul style="list-style-type: none"> ・「楠小学校区つながる会」主催の防災訓練で、看護専攻科生が地域住民に対して救急医療講習をおこないいった。また、ボランティア部員は子どもの案内係を担当した。 ・「千代田中学校健全育成会」主催の「パラエティフェスタ」で吹奏楽部と軽音楽部が演奏をおこなった。 ・「千代田中学校健全育成会」主催の「あいあい活動(あいさつ運動)」に、ボランティア部・軽音楽部員が参加した。 ・地元自治会の敬老会で、茶道部が御点前を披露し交流した。 ・天王寺動物園での「子ども遊びコーナー」を本校が担当し、8月と3月に実施した。 ・大阪ユニセフ協会と提携して様々な取り組みに生徒が有志参加した。 ①4月ユニセフ「チャリティーウォーク」 ②11月ユニセフ「チャリティバザー」 ③12月ユニセフ「ハンド in ハンド募金」 ④2月ユニセフ「新春のつどい」で「難民問題」を発表。 ・河内長野市内中学校6校の女子バスケットボール大会を本校主催で開催。クラブ員が運営を担った。
⑤ 部活動	<p>クラブ員を増やし、高校教育の目的に沿った部活動を進める</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・外部指導者の招聘 ・クラブ顧問会議での活動交流 ・クラブ活動の目標の明確化 ・「クラブ活動のあり方に関する方針」に沿った活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ活動内容 ・クラブ顧問会議の活動報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・バドミントン部、空手部、バレー部、ダンス部、吹奏楽部、イラスト部、茶道部で外部指導者を招聘し、専門的な指導を受けることができるようにした。 ・「顧問の先生やコーチの指導に満足している」が63.5%、「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」が78.3%である。生徒中心の運営をおこなうことは、高校教育における部活動の目的そのものに関わるものである。「クラブ活動のあり方に関する方針」に沿って部活動の目標を明確にして指導していく必要がある。